

嘆へあひ—により詰あひ菊光禮孫—
此泪くこあひ—り、卯の目よあいう—と
見ふ所に社よ白鳩一ツ出て此後の方に踏
居—て菊光公と對座—りり此下向の後
社依祁田悉く寄進—て築築いこ—りり
りりを嘆侍れもけ色知り—りり先玉と邪
心を掃去—後ハ懐ま幼き児の形とめて山
形の中館へ移あひて昔ハ庄内田川村のハ
懐之座よ對面—て祈禱^{ごん}—(きこ)とて此元
の宮へ入る菊光對顔の後我亦臥地とな

りハ御東臺易あり海—きと此書ありし
文を楷—児の質^{あや}は旭他^{あや}—て見(りり)田へ
神徳の彩ちるを感—て此後涙あり—と
見へ—りりと云く按^あきにも御東臺易あり海
—きとの此書書の文なとの事ハ文の用色
ふりにやとおもふんも所れと所見の語を
後よ此載傳も少將座士卒をなつて庄内
を討とらん—あこの権謀よわける菊光獨を預る
をあひりりや